

## 英訳課題

○下記の和文を英語に訳すこと。(様式自由。PC作成可。)

七世紀に倭王朝の地方官として各地に設置された筑紫・吉備・周防等の大宰は、八世紀に入ると筑紫大宰のみが残され、大宰府として律令官制の整備がなされた。こうして古代を通じて、大宰府は九州を統括するとともに、外交使節の応対など対外交渉の拠点となった。

使節は、博多湾に設けられた筑紫館で応接された。後に鴻臚館と呼ばれるようになるが、使節の応接だけでなく、来朝する唐や新羅の商人が交易を始めるようになると、公的交易の場ともなっていく。

この鴻臚館での交易を担っていたのは、都や大宰府官司の有力者層であったが、十一世紀中頃以降には、交易の拠点が鴻臚館から博多地域へと移ったと見られる。そして、交易の活動に従事する勢力は、南宋出身の貿易商である綱首へと交替した。彼ら宋商の多くが博多に居住し、チャイナタウンを形成するなど、博多は国際貿易の拠点として栄えることになった。彼らの活発な東アジア海域での活動は、圧倒的な量の中国産陶磁器の輸入という新しい海外交流の歴史を切り開くことになった。博多で荷揚げされた膨大な量の中国産陶磁器はこうした実態を如実に示している。

この博多に居を構えた宋商達の信仰の一端を知る手がかりに、宋人の姓名を記した経筒がある。経筒は平安時代の末頃より広まった紙本経埋納のための容器である。都に始まる経塚造営の信仰は九州にも及び、八幡信仰や山岳信仰の展開と強く結びつくことによって、多彩な経塚文化圏を形成するに至った。これまでの経筒研究では、博多居住の宋人達は中国陶磁製の経塚輸入だけでなく、積上式経筒を主体とした経塚の造営にも積極的に関わっていたことが明らかである。

そして、一六世紀後半になると、中国を軸にした東アジア海域のネットワークに、大航海時代を経たヨーロッパ勢力が進出してきた。彼らは交易品と同時にキリスト教宣教師をも運んできた。

日本へポルトガル人やスペイン人が来航してきた時期は、群雄が割拠する戦国時代であり、九州各地でも戦国大名がしのぎを削っていた。大名の中には彼らのもたらす鉄砲などの文明の利器を得る替わりに、キリスト教を受け入れる者も現れた。特に東アジア海域での交易活動を推進していた豊後の大友・島原の大村・有馬は洗礼を受けてキリシタン大名となった。その本拠地でキリスト教文化と、ヨーロッパの南蛮文化が花開くことになる。